

浅草

紅

團

クレナ
ホダン

川端
康成 著

カシヲ
フオ

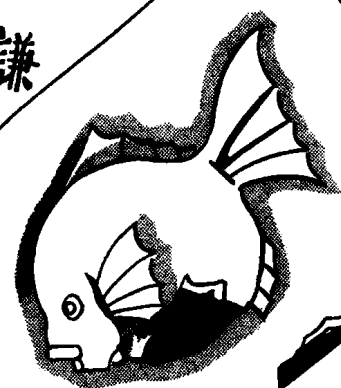
木匠館

謙

天門



謙



川端康成著
淺草紅團

昭和五年十二月一日印刷
昭和五年十二月五日發行



不許複製

淺草紅團

定價金一圓五十錢

著者 川端康成

發行者 東京市本郷區駒込上富士前町一〇九
上村勝彌

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八
君島潔

東京市本郷區駒込上富士前町一〇九番地

發行所

合資社

先進社

電話小石川 二〇四四番
二一四四番
振替東京六五二三八

共同印刷株式會社印刷

特選 名著複刻全集 近代文學館 昭和46年5月

目次

淺草紅團……………	(五)
ピアノ娘……………	(七)
隅田公園……………	(一八)
さんざりお何……………	(二五)
昆蟲館……………	(三二)
水族館……………	(三九)
銀猫梅公……………	(五二)
飛行船三十二階……………	(六九)
大正大地震……………	(八〇)
亞砒酸の接吻……………	(九四)

姥宮姫官	(101)
新「螢の光」	(102)
コンクリート	(114)
都　　鳥	(111)
塔の花嫁	(113)
白いボート	(118)
酸漿と異人娘	(114)
赤　帶　會	(119)
徹とレヴィウ	(115)
左利きの彦	(116)
少女俱樂部	(117)
松旭齋天勝	(115)
土手のお金	(111)
ドイツ狼犬	(117)

	玉音の街……………	(一〇八)
	鏡ミ裸……………	(一一四)
	日本人アンナ……………	(一二七)
	白粉とガソリン……………	(一三七)
	縛られた夫……………	(一四九)
	浅草日記……………	(一五七)
	水族館の踊子……………	(一七九)
装幀	吉田 謙吉	
挿 畫	太田 三郎	

淺
草
紅
團

——作者イフ。コノ小説ノ進ムニ從ツテ、紅國員ハシメ淺草公園内
外ニ巢食フ人達ニ、イカナル迷惑チ及ボスヤモ計リ難イ。シカモ、
アタマデ小説トシテ、コレヲ許サレヨ。——

ピアノ嬢

一

鹿のなめし革に赤銅の金具、瑪瑙の緒締に銀張りの煙管、國府煙草がかわかぬやうに青菜の莖を入れた古風な煙草入れを腰にさけ、白股引と黒脚絆と白い手甲、そして濫い盲縞の着物を尻はし折つて、大江戸の繪草紙そのまゝの鳥刺の姿が、今もこの東京に見られるといふ。いふ人が警視廳の警部だから、まんざら懷古趣味の戯れでもあるまい。

してみれば、私も江戸風ないひまはしを眞似て、この道は——さうだ、これから諸君を紅團員の住家に案内しようとするこの道は、萬治寛文の昔、白革の袴に白鞘の刀、馬まで白いのにながたがつて、馬子に小室節を歌はせながら、吉原通ひをしたといふ、あの馬道と同じ道かどうかを、調べてみるべきかもしれない。

だが、午前三時過ぎ、浮浪人もとつくに寢靜まつた、淺草寺の境内を、私が弓子と歩いてゐたとする。銀杏の落葉が降つて、鶏の聲がしきりに聞える。

「をかしいな。観音さまに鶏をかつてるかね。」といひながら、私は冷つと足をすくめる。――着飾つた娘が四人、眞白な顔で立つてゐるのだ。

「浅草つ子になれない人ね。花屋敷のお人形よ。」と、彼女に笑はれる私だ。

それから鳥刺にしても、彼等は夜が白む頃に、長い竿で梢の小鳥をねらふといふ。朝寝坊の私とは縁がない。

吉原も近頃は彼女等の寫眞を高くかかへることさへ禁じたのか、ガラス箱に入れられて、まるで蝶々の標本でも見るやうに、のぞき込まねばならない。

また例へば、タイプライターとピアノとをかたどつた、あの樂器——私達が「大正琴」といふ名で覺えてゐる樂器も、商賣人の賢さで、今は「昭和琴」と名の變つてゐる世の中だ。大江戸をなつかしがつてゐることはない。私も諸君の前に——大正地震の後の區畫整理で、新しく書き變へられた「和和の地圖」を擴けよう。

さて、上野の鶯谷から言問橋へアスファルト道を、浅草乗合自動車が通つてゐる。その浅草観音裏の停留場を北へ入ると、右は馬道町、左は千束町、それを少し行つて、左側に象潟署、右側に富士尋常小學校、そこで浅間神社に突き當つて四辻だ。社の石崖に沿うて進むと公設市場、

それから吉原土手の堀割の紙洗橋だが、橋まで行かずに、とある路地を——「いやしかし」とある路地」とは、餘りに古臭い小説の書き出しだ。彼等は何も死刑になる程の——それどころか、淺草に巢食ふ人力車夫程の、罪惡も犯してゐないのだから、ゐどころをはつきり書いてもいいのだ。

『旦那、旦那。』と、淺草公園や吉原あたりで呼びかける人力車夫は、

『遊びなれてる旦那とお見受けしやすが、たまには變つたところもいかがです。』

そして話がまとまれば、忽ちゴム足袋を下駄にはき替へ、彼等の目じるしの帽子を車につつ込み、圓タクを呼び止めて、五十錢に値切り、客を連れて行くのだ。彼等は一人一人自分の穴を持つてゐて、仲間にも決して教へない。ひどいものになると、行きずりの男に妾の世話までする。その女と云ふのは九つと四つと、おまけに前六月の子供があつたり——

だが、「千社札」といふものに興味のある諸君ならば、どこかの寺か社で「くれなゐ座」の納札を見られただらうが、紅團はまた紅座である通りに、たとへ空地にむしろの小屋がけなりとして、華々しく——彼等から思へば華々しく、彼等の一座を打つてみたいといふ、希望を持つ彼等である。そのうちの一人の少女が、仲見世でチャアルストンを踊りながらゴムまりを賣つてゐる彼等である。

二

しかし「千社札」にしたつて、彼等のことだ。それを花山帝がおはじめになつたとか、歌川豊國なども書いたとか、そこまで調べて圖案をこらす物好きでもなければ、ほんたうに千社参りを思ひ立つた神信心でもない。ただ少しばかり世間の千社講と變つてゐる證據には、ある日、船の時公——父が大川の船頭だから、皆に「船の時公」と呼ばれてゐる——そのチンピラが私に、

『五重の塔を知つてゐるだらう。』

『うん。五重の塔の上からも下からも三段目の、あのな、仁王門を向いた角に、猿の顔に角の生えた鬼瓦が一つあるんだよ。目玉は金だよ。あの猿の顔にお札をはつてやりたいなあ。』

まあこんな風に——例へば、淺草寺の仁王門の大提燈、三つあるうちの真中、入舟町の提燈の黒塗りの底だとか、向島牛の御前の庭にはうりだした牛の角だとか、とんでもない失禮千萬なところへ、「くれない座」の納札を、闇にまぎれて張りつけておくのだ。

だから、彼等の紅座そのものも、何も彼等が藝人になりたいといふわけではなく、奇想天外

な見世物をだして、とにかく一度は、世間の度膽を抜きたいらしいのだ。

かと思ふと——私は紅座がやる芝居を一幕書くやうに頼まれてゐたのだが、彼等の一人の注文が可憐だ。

『ハンドル（手を握ること）ぢやあつけないや。もうちよつといいことを、皆その同じにね、明公と順々にするやうにこさへて下さいよね。』

かと思ふと——さうだ、それは、私がその明公と六區を歩いてゐた時のことだが。

瓢箪池の岸に人だかりがして、笑つてゐる。小春日和の日さしが、それらの後姿を温めてゐる。だが、のぞいて驚いた。そこはちやうど瓢箪の結びにあたつてゐて、池の中に小さい島があり、兩岸から藤棚のある橋がかかつてゐる。その島の立花屋といふおでん屋の前、垂枝柳の下の方、手の方に、大きい男が突つ立つて、池の鯉の鮎を拾つて食つてゐるのだ。くるぶしの上まで水に入れながら、七尺ばかりの竹で水の上の鮎をかき寄せては、仁王立ちのまま、むしやむしや食つてゐるのだ。

『ひでえ氣違ひだな。鯉の上前をはねてやがる。』と、こちら岸ではまた大笑ひだ。十四五切れの鮎をむさぼりつくすと、彼は素知らん顔で、おまけにまことに威風堂々と立ち去つてしまつた。

ところが明公は小走りに、昆虫館の裏で彼を、

『ケン、ケン。』と呼び止めると、十錢玉をくれてやつた。そして私に、

『あいつ、この間までこのズブだった。』

『ズブつて？』

『まあ乞食の一種ね。縄張のない、流しの乞食。——それが足を洗つて、この間立派に労働者に成り上つたて聞いたけど、また舞ひ戻りね。不景氣なこつた。』

『なんだ。氣違ひぢやないのか。』

『氣違ひの眞似でもせず、池の麯が食べられますか。だけど、ほんたうに氣が違つたのかな。』

正氣だつたつて、人は人の見てゐるところで、芥箱のものを食べるよ。それに舞ひ戻りぢや、あいつ生意氣つてことになつて、ズケも分けてもらへないし、ひもじいよ。』

このやうな彼等であつてみれば——私は諸君を彼等紅團員の住居へ、案内してもいいではないか。そこで、「とある路次」とは——けれども、私がそんな「とある路次」へなど迷ひ込んだのは、物好きの探訪ではなく、私には私の祕密の用があつたのだ。そしてその袋路次の裏に、斷髪だんぱつの美しい娘がピアノを弾いてゐたのは、私の拾ひものであつたのだ。



